

## 感情と開発

### —人類学における応用的実践の新展開—

関根久雄（筑波大学）

本分科会は、社会開発や開発援助の文脈における人々の「感情」の揺れ動きに注目して、実践人類学の新たな可能性を検討することを目的とする。いわば、人類学の学的営みと応用的実践との連続性を、「人々の感情」の側面から捉え直す試みである。

1990年代以降、開発に係る諸実践において、調査者や実務者が支援の対象となる人々の目線に可能な限り近づきながら「リアリティ」を捕捉することの重要性が指摘され続けている。そのような姿勢の提唱者の1人であるチェンバースはそのリアリティについて、科学的客観的事実というよりは、「個人の解釈によって形成される事実」と述べる。それは、いわゆる専門家が科学的知識と称するものに基づいて一方的に自分たちの知識のみで解釈するリアリティではなく、ローカル・ノリッジであったり信仰であったり、現地の人々の個々の経験から形成される価値観に由来する個人的リアリティのことである。開発実践のプロセスを民族誌的に検討すると、プロジェクトの動向が、ニーズの把握やコンセンサスの獲得など、単に人々の表面的な動向を追求するだけでは把握しきれない、関係する人々の感情(emotion, sentiment)の動きに大きく左右されることがわかる。本分科会はそのような感情を個人的リアリティを構成する要素として捉えたい。

ゴードンは人間の感情を生理的感情という一次的なもの、社会的感情という、他者との関係において社会的に生み出される二次的・構成的な感情の2つの次元に分類している。つまり、一次的な感情を二次的に言語化・行為化する際には、状況に適合するように感情を調整する装置としての社会的文化的規範を通過させているということである。このことを、感情喚起のプロセスを理解するための認知的評価に照らしてみると、感情は自己と事象の関連性に関する主観的評価によって生じるものであり、その表現は評価や解釈の結果の表明であるという。それを図式的に表すと、「事象→認知的評価→感情」という流れになる。ここでいう感情とはこの一連の認知的評価のプロセスによって行為される個人や集団の開発実践をめぐる諸経験のことであり、実践人類学において重要な点は、そのような感情を理解するための立論である。そこで、「事象→認知的評価→(一次的)感情」というプロセスの先に、さらに「→社会文化的規範を参照→行為化・言語化・身体化された(二次的)感情」

という追加的な認知プロセスを想定したい。この二次的・構成的感情はさらに別の一次的感情を生み出す前提的な実践でもあり、2つの次元は絶え間なく循環するプロセスの中にある。

これは、日常的な相互関係の中に埋め込まれた行為として感情をみるロザルドの視角や、ルッツとアブ=ルゴッドのいう文化的規範を通じた感情へのアプローチと共通する見方である。彼女らは心理人類学における本質主義的な感情研究を批判し、社会的な相互行為の中で立ち上がってくる感情に関わる言説の束に注目することの重要性を指摘している。

開発実践の文脈において感情を扱う際に、どのような感情の調整装置があり、それを通してどのように感情が表出され、またそれに対応しているのか。ここでは行為としての感情を対象とし、感情と行為との間の往還運動に関する社会的・文化的メカニズムを捉え、それぞれの地域の開発に関わる感情経験の文化的特徴を明らかにした上で、新しい応用的実践の人類学の姿を考えたい。

本分科会では4人の発表を予定している。関根久雄は、ソロモン諸島の開発における妬みや嫉妬の怒りなどに関する事例を示し、ソロモン諸島人がどのようにして開発において「怒り」を抱き行為化させるのか、そしてそのような感情に関わる文化的反応の実践形態を明らかにする。鷹木恵子は、チュニジアにおいて実施された構造調整の一環としての国営農場の民営化とそれに対する農民たちの反応と、それがチュニジア革命後の農民暴動を誘発するに至った要因について、特に農民たちの感情の背景にある論理や意味の編み目に注目して考察する。鈴木紀は、メキシコ農村開発の事例を取り上げ、受益者の当事者意識の程度と開発プロジェクトの自立発展性との相互関係について、人々の嫉妬の感情に注目して明らかにする。内藤順子はチリで貧困支援の一環として検討されてきた「スラム観光」の実施プロセスを取り上げ、現場における当事者たちの様々な感情表出の様子や、当事者の感情を操作することによって計画が方向付けられたり頓挫したりする複雑な様相について報告する。

これら感情と開発に関する諸事例を通じて、人類学と開発実践との新しい関係のあり方について考察したい。

**キーワード** 感情、感情経験、社会開発、開発援助、実践人類学